

岡 弘毅をめぐって

An Analytic Study on the Life and Work of OKA Kōki

松 本 郁 代

Ikuyo Matsumoto

はじめに

本稿においては、岡 弘毅（1844年～1934年）の人物像を探ることを課題とする。岡は幼保一元化について論を展開した人物として一部の領域において知られているが、必ずしも社会福祉研究において知名度が高い人物とはいえない。それは、社会福祉の歴史について書かれたテキストを開くと必ず登場してくる井上友一や留岡幸助といった人物と同列に扱われていないという点にも現れている。また、最近完結した一番ヶ瀬康子・津曲裕次 編『シリーズ福祉に生きる』大空社の全50巻にも収められてはいないということにも示されている。

しかしながら、筆者はかねてより社会福祉の歴史を記述していくにあたっては、「歴然として存在しながら史には残されなかった人たち」を掘り起こすことを試みようとしてきた。

その中で、筆者は「1930年代における“田山セツルメント”および“小湊セツルメント”の様相」を記述し、東北におけるセツルメントの実践に係わった岡倫氏の存在に注目するところとなった。そして、聞き取りのなかで岡倫氏が岡弘毅の次女であることを確認した。拙稿において十分に解き明かすことができなかったが、これらのセツルメントの実践を暗に陽に支えた人々やそのつながり、理論的裏付けといったものが、この岡弘毅からも発信されていたのではないかといった関心から彼に注目することとなった。

ただここでは、上記のセツルメントと岡弘毅との関係を掘り起こすことを目的とするのではなく、彼が社会事業に残した足跡について先行研究を手掛かりにして紹介し、彼が当時の社会事業に与えた影響、彼の周囲に存在した人物と岡との関係について探ることによって、岡の人物像を述べ

ることにとどめる。

1. 岡弘毅に関する先行研究

岡弘毅についての先行研究のひとつは「岡弘毅と社会事業——その足跡と遺稿」都政人舎出版部、1980年。これは、岡倫氏を中心として、岡弘毅に直接接触のあった人々も参加して岡についてまとめたものであり、岡弘毅の論稿を含めて編集されている。

二つ目として挙げられるのが、次のものである。上笙一郎・山崎朋子『光ほのかなれども』朝日新聞社、1980年。この中では、徳永恕と岡弘毅とのつながりが明かにされている。また、岡倫氏が徳永恕を看取った人物であることも書かれている。

もうひとつは、復刻版として龍溪書舎から1984年に発行された『社会福利別冊（東京府慈善協会報）解説・総目次・索引』に掲載されている吉田久一氏による解説である。この中で吉田氏は、『社会福利』主要執筆者15人について紹介するなかで、岡について「東京府社会事業の世話役的存在」⁽¹⁾と評価している。ちなみに他の執筆者として石井亮一・生江孝之・井上友一・山室軍平・矢吹慶輝・高田慎吾・小澤一・長谷川良信らが挙げられており、この錚々たるメンバーと同列に紹介されている。

2. 岡弘毅が社会事業に残した足跡

(1) 東京府および東京府社会事業協会

岡弘毅についての吉田久一氏の評価は先に述べたとおりである。岡が自ら死を選んだ後で、彼の周囲にいた多くの人々から、岡は社会事業界になくはならぬ存在であったと言われた。そのことは、当時の東京府社会事業主事であった早田正雄

が次のように述べていることから判る。

「岡さんは東京の社会事業界の大きな存在であった、明治、大正、昭和三大時代に於ける東京の社会事業を語る場合には必ず引合に出さなくてはならぬ程、各種の社会事業に関係がある、殊に東京府の社会事業を語る場合にはどうしても岡さんを座長の椅子に据えなくてはならぬ」⁽²⁾

また、岡が亡くなった当時、彼は「東京府社会事業の父」⁽³⁾と呼ばれていた。これは先の早田が述べたように、岡が活躍した時期の東京においては、慈善事業および慈善事業の組織化をおこなっていた時期から社会事業へと発展した時代であった。そして岡はその渦中で、内務省から東京府内務部さらに東京府慈善協会（のちの東京府社会事業協会）においてその中心的存在として、各種の社会事業に係わっている。

例えば、東京府社会事業協会が発行していた『社会福利』は岡が編集を行っていた。また、東京府社会事業協会は各種団体の連絡を行うことを第一の目的としていた。当時の東京府における社会事業の領域は多岐にわたるものであって、それらに岡は目配りをしていたようである。ちなみに、そのことが、彼が亡くなったときに執り行われた追悼式での参加者に現されている。そのなかには長谷川良信や小澤一といった当時の社会事業においては第一線で活躍した人から無名の保育者にいたるまで様々であった。ちなみに岡への葬送の辞は生江孝之によるものであった。これらの人々は、口々に岡さんには世話になったという表現⁽⁴⁾をしている。井上友一知事の下で東京府の社会事業を支えるにあたっては、社会事業全般にわたる目配りを怠らず、社会事業の各方面からの相談事には真摯に耳を傾けた岡の姿がうかがえる。

岡は東京府社会事業協会において、方面委員について早く取り組みを開始している。

しかしながら、当時これほど評価された人物がなぜ人々の記憶のかなたに追いやられてしまったのかは解明する必要がある。ひとつには急逝したことにより厚生事業における論者とはならず、ましてや戦後に活躍する場面がなかったという点

もその要因であろう。しかも、彼が亡くなった後に迫り来たものは他でもない戦争という波であり、彼が苦勞して形成した社会事業が厚生事業というかたちで変質していったこともその要因であった。

(2) 光明学校開設およびその周辺

岡は東京府社会事業協会に在籍している中で、医師の田代義徳(1864年～1938年)と出会っている。田代は、光明学校開設にあたって尽力した人物として記憶されている。その田代の発想によるものであった光明学校の構想は、東京府社会事業協会の協力もあって開校を実現する事によって結実している。岡が光明学校開校についてどのような協力をしたのかは必ずしも明確ではない。しかしながら、少なくとも田代について岡が記述しているものが残されており⁽⁵⁾、岡が田代に対しての協力をしたということを推測するという事は自然である。

岡と田代との協力関係は、田代が医師であったことを社会資源として進められおり、またそのことが東京府社会事業協会の病院であって、救療事業を行う病院を開くことにつながっている。また、田代は柏倉松蔵に勧めて柏学園を開園させている。やはりこれについても、岡が田代について語っているなかに登場してくることから、柏学園の創設についても岡の何らかの関与があったとみるべきであろう。

(3) 岡による各種社会事業施設設置

上記のように岡は東京府における公私の施設の創設に係わっていた。それは東京府における社会事業施設のほとんどに関係していた。いくつかの例を挙げるまでもなく、例えば、藤井コトがいうように、藤倉学園は岡が創設したのだと言ってもよいくらいの施設であるという。つまり、大島において感化事業を始めようとした中内春吉が東京府社会事業協会を訪ねた際に、岡は人里離れたところでの感化事業はうまくいかないだろうから知恵遅れの子どもたちの施設をつくるように勧めた。こうして出来たのが藤倉学園であった。⁽⁶⁾

それ以外にも、いわば東京府の社会事業施設の実験場のように岡が関係した社会事業施設が登場

している。

3. 岡弘毅を取り巻く人々

(1) 岡弘毅と井上友一周辺

まず岡との関係で筆頭に挙げられるのは、井上友一である。井上は東京府の知事としても活躍した人物であり、井上は「岡は間に合う男だ。」⁽⁷⁾という言葉を残している。岡は武蔵野学院創立の際に相田良雄から武蔵野学院に推薦されているが、井上は「岡君は将来性を持つて居る、東京府でも十分に優遇する積だから横合から手を出さずに」⁽⁸⁾ いてほしいと相田に言っている程であった。

井上はかの有名な『救済制度要義』を刊行しているが、周囲からは井上がこの本をどのように実践に結び付けていくのかとみられていたようであった。それを可能としたのが岡であった。井上は岡を頼りにしており、井上知事の手足となって岡は活躍している。また、井上の死後残されたその娘（三井報恩会勤務）が岡のもとに相談に訪れている。

また、井上は留岡幸助が井上を訪ねて来たときには特に岡を呼んで話をしている。⁽⁹⁾ こうして岡もこの留岡幸助との関わりをもつにいたっている。岡本来の人格もあったが、感化児童について役所に相談に訪れた人物に対して丁寧に話を聞いている。当時の役人たちの中には不良少年という真面目に話を聞いてくれない人もいたというのだから、岡の存在は社会事業の実践を行っている人たちにとっては無二の存在であったに違いない。

(2) 岡弘毅と二葉幼稚園関係者

岡と二葉幼稚園（のち二葉保育園）関係者については先の『光ほのかなれども』に詳しい。野口幽香・徳永恕とともに岡に対する信頼を寄せていた。徳永恕は、当時の施設の動向などについて岡に情報を提供し教示をもらっていたようである。そういう意味では、両者に互いに情報源と知恵袋を抱えていたということになる。二葉が財団法人化するといった組織替えをするうえでも、岡の働きが頼りにされていた。

さらに、野口幽香・徳永恕を介在して岡がつな

がりをもった重要な人物として高田慎吾が挙げられる。高田は大学卒業後に養育院に一時勤務しており、二葉によく出入りしていたようである。この高田に対して岡は「高田先生」と慕っていたという。また高田の方も「岡君」といって親しく交友していたというのである。そして高田を中心に当時の社会事業関係者が集まっており、岡もそのひとりであった。これは二葉の藤井コトの記憶の中にあることであったが、藤井自身は岡に勧められて児童保護委員を引き受けていた。⁽¹⁰⁾

ところで、高田は言うまでもなく後の大原社会問題研究所におけるメインスタッフであった。この二葉での高田・岡・徳永といったメンバーが社会事業の理論家・実践者としての交流をもっていたことは興味深い。岡が周囲の社会事業関係者に慕われ頼りにされた背景には、この高田との交流によって良き社会事業家としてのモデルに接する機会に恵まれていたということにもよると考えられる。

4. 岡弘毅の人物像

(1) 小澤一による岡弘毅の評価

小澤一は次のように岡について評価をしている。

「特にわたしが一言申したいと存じますことは、岡氏は明治、大正以来の社会事業の歴史の上に自己の信念を持ち、また一代の経験を以て體驗を致した本當の社会事業家、典型的社会事業家として一代を了はられたことであります。

あの位になりますと理論的な方面に走るとか、或いはいろいろの事情で熱意を失つてしまうのが普通でありますのに何處迄も純乎な社会事業家としての心持を持ち続けられた。」⁽¹¹⁾

そしてその結果として、社会事業が転換していく時期にあたって自己の社会事業に対する信念を転換することが出来ずにその生涯を終えたのだというのである。たしかに、勤勉実直であって30年間社会事業のために尽くした一人の社会事業家が小澤が言うように迫りくる戦争の波に耐え切れず、しかもそのことによってそれまでのように援助を必要とする人々を守り切れるという見通しも

持てないという事態が容易に想像できる時代に岡は直面していたのであった。

当時の社会事業家が上記のような事態にさらされたとき、それに対してとった態度は、例えば戦時厚生事業に協力するという対応の仕方もあれば時代の流れに抗するという対処のしかた、あるいは理論家の場合は筆を折るといった、いくつかの典型に分かれるが、岡の対応はそれ以上前進しないで自己を守ることであった。

小澤が言うように岡ほどの社会事業家であれば理論家として変身していくことも可能であった。たしかに、当時としては理論的水準も高かった『社会事業』に岡は論文を掲載していた。例えば、「療養事業の連絡統制」(第20巻第1号、1936年5月)、「母子保護施設経営に関する一考察」(第21巻第7号、1937年10月、および第21巻第8号、1937年11月)がそれである。このほかにも執筆された論文は残されてはいるが、井上友一のように学究肌の理論家とはならなかった。大学を卒業して理論家となった井上とは違う形で岡は理論を求めている。それは、岡自身が語っていたように、大学を出ていない代わりに、自らの勉強の機会として各種の会合に参加することでそれを満たしていたことにも現れている。⁽¹²⁾

しかしながら、その取り組みにも限界があった。「唯々現在及将来の事業進展を考へて疲れ切つたのです。」⁽¹³⁾ という松田賢一の発言に表現されているように、よりどころとする理論によってその見通しを自ら切り拓いて行くことに限界がみえ、社会事業の実践を考えたときにその展開をどの方向に見出せば途が開かれるのかということについても見通しをもてない状況に追い込まれていたとみることができる。これは、閉塞的な時代状況のなかで、当時の一社会事業家が経験した試練であった。

(2) 岡関係者による岡の人物評

岡が大変真面目な人物であったことは多くの人が語っている。そのなかでも、自宅に物品が送られてきてもそれを本人や家族のために使うという人物ではなかったということを挙げておこう。その物品は社会事業団体に彼が寄付する⁽¹⁴⁾ ことによって処理をしている。そして生活は質素であっ

たという。私腹を肥やすということがない彼の生活ぶりは、彼の人間性に対する信頼というものを高めたに違いなかった。

また、次のように岡は語られている。

「岡さんは、その人格が高潔で物事に私心がないやうに、政治的野心とか、またはそれに類似した親分的気持ちで人の面倒を見るのではなく、全く御自分の性格の表はれとして、純真な行ひとして多くの面倒を見て來られた。」⁽¹⁵⁾

これらは岡の日常や仕事をよく知る人たちによって語られているのであり、彼の人となりをよく表している。

おわりに

岡弘毅は社会事業家としてその生涯を終えた。ただ空虚な理論をうちたてることに熱中することはなく、私利私欲のために周囲の人間との関係をとりに結んでいたわけでもなく、人生の大半は東京府において社会事業の連絡調整に努め、世の中が戦時厚生事業に巻き込まれていく前にこの世を去った。終始社会事業の裏方に徹し、多くの人に信頼され、しかしながら社会事業分野において多方面にわたって目配りをした彼は真の意味での社会事業家として、その存在自体が後世に伝える業績となったといえよう。

註

- (1) 『社会福利別冊(東京府慈善協会報)解説・総目次・索引』龍溪書舎、1984年、p.19
- (2) 早田正雄「岡さんの生態」『社会福利』附録第24巻第2号附録、1940年2月、p.55
- (3) 「岡弘毅君追悼録」『社会福利』附録第24巻第2号附録、1940年2月、p.74
- (4) 前掲、1940年2月、pp.1-84
- (5) 河田茂『社会福利』第23巻第4号、pp.62-71。田代について岡が記述したもののさえも自らのものとして雑誌に記載することを遠慮した。しかしながら、田代との共同事業において、岡の発想などが田代の背後にあったことが考えられる。
- (6) 藤井コト「岡先生と二葉保育園」(『岡弘毅と社会事業』編纂刊行会『岡弘毅と社会事業』——その足跡と遺稿』都政人舎出版部、1980年) p.418
- (7) 「岡弘毅君追悼録」『社会福利』附録第24巻第2号附録、1940年2月、p.74

- (8) 相田良雄「哀悼岡弘毅君之急逝」『社會福利』附録第24卷第2號附録、1940年2月、p.36
- (9) 「岡弘毅君追悼録」『社會福利』附録第24卷第2號附録、1940年2月、p.74
- (10) 藤井前掲
- (11) 財団法人東京府社会事業協會常務幹事
- 「故岡弘毅君追悼座談會」『社會福利』第24卷第2號、1940年2月、p.63
- (12) 前掲、p.54
- (13) 前掲、p.62
- (14) 小林正金「岡さんを偲ぶ」『社會福利』第25卷第11號、1941年11月、p.38